様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２７ 年　 ６ 月 １６ 日現在

機関番号：１０１０１
研究種目：若手研究(B)
研究期間：2012～2014
課題番号：２４７２０１７０

研究課題名（和文）広東語と台湾語の否定詞――存在否定動詞の文法化をめぐる比較対照研究

研究課題名（英文）Negators in Cantonese and Taiwanese : A contrastive study of the grammaticalization of the negative existential verbs

研究代表者
飯田　真紀（Iida, Maki）

北海道大学・メディア・コミュニケーション研究院・准教授

研究者番号：５０４０１４２７

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　1,700,000円

研究成果の概要（和文）：　本研究は中国語南方方言の一変種である広東語と台湾語における存在否定動詞“無”の否定詞への文法化の様相を明らかにすることを目指した。
　まずはじめに、否定詞“無”及びその肯定形の対応形式“有”の各方言における使用範囲の相違について、述語句の持つ<時間的限定性>に注目しながら説明することの有効性を提起した。また、広東語については、“無V/有V”構文はVそのものの非存在/存在に言及するだけで、Vの実現への推移や変化に言及することができないという意味的特徴を持つことを、アスペクト助詞“-到”の機能の分析を通して明らかにした。そのほか、“有V”構文について、各方言固有の談話論的特徴を探った。

研究成果の概要（英文）：This study explored various aspects of the grammaticalization of the negative existential verb wu2 into negators in Cantonese and Taiwanese, which both represent major Southern Chinese dialects.
First, it suggested that the difference between Cantonese and Taiwanese in the range of use for the negator wu2 and its corresponding affirmative form you3 could be explained in terms of temporal localization. In addition, by analyzing the function of the aspect marker -dou3 in Cantonese, which only appears in ‘wu2 V’/‘you3 V’ sentences, this study showed that the ‘wu2 V’/‘you3 V’ construction in Cantonese only expresses the non-existence / existence of an action or a change of state that the V denotes and therefore it cannot refer to a shift toward the realization of an action or a change of state. Furthermore, the discourse-pragmatic features of the affirmative ‘you3 V’ construction in each dialect were also discussed in this study.

研究分野：中国語学

キーワード：広東語　台湾語　否定詞　存在　文法化

１．研究開始当初の背景

数多の方言を抱える中国語は、諸方言の示すバリエーションが多様で、言語の普遍的特性を追求する類型論的研究にとって格好のフィールドである。

本研究で取り上げる否定詞について見れば、数種類の否定詞を使い分ける方言もあれば、逆に全て一つの否定詞で済ませる方言もあるなど多彩である。否定が言語普遍的な現象で一般性の高いテーマである以上、中国語諸方言におけるこうした否定詞の分合パターンの類型化や各方言における否定詞分合のメカニズムの解明は、類型論的に重要な課題であるが、理論的、実証的双方の見地からして見るべき先行研究は少ない。

そうした中でも、張敏 2002 は中国語の南方諸方言において、存在否定を表す動詞(“無”と総称する)が述語の否定を担う否定詞へと文法化を遂げ、元からあった一般否定を表す別の否定詞がカバーしていた領域を侵食していくプロセスを仮定した。しかし、二次資料データを主に用いた張敏 2002 には個別方言の言語事実についての誤認や、現象の解釈に乱暴な部分がある。そこで、まずは少数個の方言を対象に、否定詞の用いられ方についてそれぞれの言語事実を丹念に積み上げて比較対照し理論化・一般化に結びつけるという手法が不可欠になってくる。

こうした問題意識のもと、本研究では、研究代表者が熟知する広東語に加え台湾語(台湾で話される閩南語)という同じく南方方言の代表的変種を取り上げ、両方言の存在否定動詞“無”の否定詞への文法化の様相を実証的に描き出すという構想を持つに至った。

２．研究の目的

本研究は南方方言の一変種である広東語と台湾語における存在否定動詞“無”の否定詞への文法化の様相を明らかにすることにあり、具体的には以下のような考察を行う。

(1)各方言における存在否定動詞“無”及びその肯定の対応形式であり存在動詞に由来する“有”の使用範囲を考察し、その広狭を決定づける要因を探る。

(2)“無/有 V”構文について、各方言固有の意味的・統語的特徴を探る。

(3)“無 V”と対をなす“有 V”構文について、各方言固有の談話論的特徴を探る。

３．研究の方法

(1)コーパス構築

実証的な分析を行うためには、大量の実例を言語データとして集めたコーパスを構築し利用する必要がある。広東語については、筆者がこれまで構築してきたものが利用可能であるが、台湾語はほとんど未整備なため、特に重点的に行う必要があった。そこで、台湾に渡航し、コーパス用資料となる台湾語小説・脚本を選別・収集した。そのほか、論説文や詩などのジャンルからも台湾語資料を補充した。これに香港で入手した広東語小説・脚本などの資料をあわせてデータ入力を業者に外注し、簡易的なコーパスを作成した。

(2)コーパス調査と母語話者への聞き取り調査

(1)の要領で作成したコーパスを利用して実例を調査し、また国内外の広東語・台湾語母語話者への聞き取り調査もあわせて行い、考察に必要な言語データの収集を行った。

(3)考察と口頭発表

「２.研究の目的」で述べた課題について考察を行い、その成果を小規模の研究会や学会で報告し、フィードバックを得た。

４．研究成果

(1)当初の研究目的に関する成果

①広東語と台湾語における“無 V”及び“有 V”の使用範囲

まずはじめに、各方言における否定詞“無”及びその肯定の対応形式で存在動詞に由来する“有”がどういった述語句に使用可能か、その使用範囲の広狭について、述語句を構成する動詞・形容詞自体が持つ語彙的意味、及び述語句全体が表すアスペクト義に着目し、考察を行った。また、台湾語と同じ閩南方言に属す福建省の甫田方言のような周辺方言についても、母語話者への聞き取り調査を行い、考察の補助とした。

以下は暫定的な考察結果である。広東語では“無”や“有”の使用が可能なのは、<時間的限定性>を持つ事象を表す述語句のみで、<時間的限定性>が顕著でない/持たない事象には“無/有”が用いられない。一方、台湾語では<時間的限定性>が顕著でない/持たない事象にまで“無/有”の使用が拡張していると見られ、甫田方言も台湾語と同じ振る舞いをする。(<時間的限定性>については工藤 2002 参照)

各方言における“無/有”の使用範囲の拡張については、張敏 2002 の類型論的研究では高頻度の動詞や助動詞において先に生じるとされていたが、頻度の観点だけでは現実の言語事実をうまく説明できない。本研究では<時間的限定性>に着目することで、より事実に即した妥当な説明が可能になり、類型論的研究にも貢献できるような分析ができたのではないかと思う。

しかしながら、上述のような使用範囲の差異が両方言の文法体系におけるどういった差異を反映しているのかについては、本研究期間内には明らかにすることができず、今後さらに踏み込んだ考察が必要である。

②広東語の“無/有 V”に関する分析

広東語については、上述のように<時間的限定性>を持つ事象にのみ“無/有”が用いられるのが原則で、したがって述語の語彙的意味に着目して言うならば、動作・変化といっ

た動的事象を表す述語にのみ使用可能で、状態・属性といった静的事象には“無/有”は用いられない。しかしながら、例外的に、アスペクト助詞の“-到”を伴えばたとえ静的事象でも“無/有”を用いることが可能になる。(ただし、その場合は当該事象への変化の否定・肯定を意味する。)“-到”は“無/有”文にしか現れることがない特殊なアスペクト助詞であることから、その機能の解明は広東語の“無/有Ｖ”文の振る舞いを明らかにする上で重要な課題であった。そこで、本研究では“無/有＋V＋到”文における“-到”の機能についても考察を行い、以下の結論を得た。(論文①及び②)――“-到”は“無/有”と共起する環境において「事象Ｖの実現への推移」を表す標識であり、語用論的には事象が実現を見る前段階の過程に焦点を当てる効果を持つ。こうした“-到”の機能は広東語の“無/有Ｖ”構文がＶそのものの有無に言及するだけで、Ｖ実現への推移や変化に言及することができないという点を補うものである。

また、論文①では付随的に、アスペクト助詞“-到”の文法化経路についても考察を行った。その結果、アスペクト助詞“-到”は「到着」義を表す動詞“到”に由来するが、より直接的には「動作ＶがＰという＜点＞まで継続する」という構文的意味を持つ“Ｖ到Ｐ”の“到”が来源であるとの見解を提出した。

③“有Ｖ”構文の分析

本研究ではこのほかに、“無Ｖ”と対をなす“有Ｖ”構文について、各方言固有の談話論的特徴を探った。

よく知られるように、両方言では、“無＋Ｖ”が「事態の非存在」(＝否定)を表すのと平行的に、肯定形の存在動詞“有”を用いた“有＋Ｖ”の方も「事態の存在」を表すことができる。しかし、この南方方言特有の“有＋Ｖ”構文は、その談話論的機能が方言によって相当異なるにもかかわらず、その点は等閑視されてきた。そこで、本研究では、独自に構築したコーパスを有効活用し、両方言の“有”構文の相違点を談話論的に明らかにすることを試みた。

初歩的な考察の結果は以下の通りである。

両方言ともに、“有Ｖ”は事態の非存在が想定される場合に、その想定を覆し、当該事態が存在することを主張するために用いられる有標的な構文である。したがって、想定の共有がそもそもなされていない状況、例えば文全体が新情報を表すような状況では使用されることはない。これは、否定形である“無Ｖ”が肯定的事態が想定される場合にその想定を正す機能を持つため、文全体が新情報を表す状況で使用されないのと並行的である。しかしながら、コーパスデータを用いた調査によると、広東語と台湾語とでは、“有Ｖ”の使用を可能にする想定の言語的明示度がかなり異なっていることが伺われた。このような談話論的振る舞いの違いの詳細およびそれを生み出す要因については、本研究期間内に明らかにすることができなかったが、今後、さらに掘り下げて検討していきたい。

(2)想定外に得られた成果

① ４.(1)②で述べたように、広東語においては、アスペクト助詞“-到”の機能の解明が、“無/有 Ｖ”構文の意味的特徴を明確にするに当たり、重要な課題であった。本研究ではさらにこのアスペクト助詞の文法化経路を考察したが、ここに典型的に見られるように、「到着」義を表す動詞“到”の広東語における文法化・機能拡張の仕方には他方言にはない特徴的な傾向・特質が見られる。本研究ではこの問題についても議論を発展させ、口頭発表を行った。(学会発表②))

② そのほか、否定に関連する構文を多角的に検討するため、談話モダリティ領域における否定現象をも考察した。具体的には、文末助詞 ge2 を取り上げ、話し手が当該の事態を想定と相反する事態だと捉えている、すなわち想定の否定を表す談話モダリティ形式であると分析した。また ge2 はさらに機能拡張し、他人の暗黙の主張への否定(=反駁)を表す機能をも獲得している点を指摘した。(学会発表①)

(3)未達成及び想定外の部分について

本研究の目的は、広東語と台湾語における存在否定動詞“無”の否定詞への文法化の様相を明らかにすることにあったが、(1)①や(1)②で述べたように、いくつか未達成の課題がある。

これは、1 つには広東語に比べ、台湾語に関する知識や語感が乏しく、短期間でその欠落を補うことが難しかったためである。もう 1 つは台湾語コーパスの整備が遅れたことで、これには外注先のデータ入力業者の作業が予想外にはかどらなかったことにも一因がある。

他方、広東語については知識や語感も十分にあり、コーパスも充実していたため、当初の予定よりも考察範囲を広げ、否定現象について多角的に検討することができたため、想定外の成果につながった。

＜引用文献＞

①張敏 2002. “上古、中古漢語及現代南方方言裡的“否定-存在演化圈.” *International Symposium on the Historical Aspect of the Chinese Language: Commemorating the Centennial Birthday of the Late Professor Li Fang-Kuei. (Vol II.)*, 2002. pp. 571-616.

②工藤真由美 2002. 「現象と本質—方言の文法と標準語の文法—」,『日本語文法』2 巻,2 号,46-61.

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計　3 件）
①飯田真紀　広東語の“有／冇Ｖ到”構文――“-到”の機能と文法化･機能拡張――　『木村英樹教授還暦記念　中国語文法論叢』木村英樹教授還暦記念論叢刊行会（編）,157-176．2013 年 5 月,白帝社:東京．(査読なし)
②飯田真紀　粵語裏的動態助詞“-到”與否定　《第十五屆國際粵方言研討會論文集》湯翠蘭主編,274-280．2012 年 12 月，澳門：澳門粵方言學會.(査読あり)
③飯田真紀　粵語的條件分句標記“ge3”《中國語文》2012 年第 5 期(總第 350 期 2012-09-10),p.458-468．(査読あり)

〔学会発表〕（計　2 件）
①飯田真紀　粵語句末助詞 ge2 的語義功能及功能擴張現象，第十八屆國際粵方言研討會，2013 年 12 月 7 日香港科技大學 中國語言學研究中心.
②飯田真紀　粵語裡“到”的功能擴張，國際中國語言學學會第 21 屆年會(IACL) 2013 年 6 月 9 日，台灣師範大學.

６．研究組織
(1)研究代表者
飯田 真紀（IIDA MAKI）
北海道大学・大学院メディア・コミュニケーション研究院・准教授
研究者番号：50401427